

研究ノート 人事記録にみる近代中国の銀行員の給与・経歴・家族 -- 上海商業儲蓄銀行を中心に

著者	岩間 一弘
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	47
号	4
ページ	21-38
発行年	2006-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007475

人事記録にみる近代中国の銀行員の給与・経歴・家族

上海商業儲蓄銀行を中心に

いわ 岩 間 一 弘

はじめに
銀行員の経歴
銀行員の家族と女性行員
おわりに

はじめに

1990年代以降の中国都市部では、企業経営者や労働者の他に、管理・会計・事務等の頭脳・精神労働に従事する俸給生活者たちが台頭し、新たに「中間層」として広く認知されつつあるといえる〔園田 2001; 陸 2002〕。しかし、かつての中国共産党の都市工作においては、「職員は労働者の特殊な一部」〔天津総工会籌委会 1949〕と規定され、職員と労働者を分けて論じることが避けられたため、中華人民共和国成立以前における俸給生活者層形成の史実は忘れ去られ、1990年代後半まで新中間層が歴史研究の対象にならなかった〔注1〕。しかし現在では、上海市档案馆（公文書館）において中華民国（以下、民国）期の民間企業の文書資料が公開され、幾つかの企業については職員の個人情報を含んだ人事記録や履歴書をも閲覧することができる。それらの中から上海商業儲蓄銀行（以下、上海銀行）と上海女子商業儲蓄銀行（以下、上海女子銀行）の行員に関するデータを網羅的に整理・分析し、中華民国期の俸給生活者の経歴や家族状況の実

態を解明する素材を提供した研究ノートが本稿である〔注2〕。

周知のように、上海は両大戦間期までに東アジア交易網最大の中継地、ならびに中国の工・商業の中心地になり、外国資本だけでなく中国資本の工場・銀行・大型商店が増加・成長し、資本家や労働者の他にも俸給生活者が活躍の場を広げた。1930年代後半の上海では、下級官員は1～2万人、教員は約1～1.5万人程度であったのに対して〔上海市政府社会局 1936, 36-37, 105-106〕、旧来の小商店で働く従業員13～4万人の他に、企業職員が約14～5万人いたと推計され、その数は中国各地で随一であった〔顧 1939, 621-622〕〔注3〕。

民国期の俸給生活者を待遇面から大雑把に分類すると、最も高給なのが銀行員、外資系企業・国営企業の職員、公務員など、次に新聞・出版事業の従業員、大学・高校・中学の教員など、最も薄給なのが商店店員、小学校の教員などであったといえる〔張 1990, 746-747; 羅・宋 1999, 112-126〕。とくに銀行員は手厚い給与や福利厚生に恵まれたことから、「鉄飯碗」（食いはぐれない職業）のさらに上の「金飯碗」（すばらしく収入のよい職業）と認識され、「銀行の経理（支配人）をするのは、一県の長となるよりも快適である」〔職業与修養社 1939, 158〕とさえいわれ

た。そして、1910年代後半から勃興し20年代後半から「黄金時代」を迎えた中国資本系の民間銀行には、「南三行」といわれた上海商業儲蓄・浙江興業・浙江実業、「北四行」といわれた中南・金城・塩業・大陸銀行などがあり〔Cheng 2003, 46-52〕,他にも同時期の国営金融機関には「四行二局」といわれた中央・中国・交通・中国農民銀行,中央信託局・郵政儲金匯業局などがあつた。なかでも上海銀行は1930年代までに中国最大の民間銀行になったが,大手民間銀行の待遇は中小銀行に比べてはるかによく,とくに「南三行」の待遇は国営銀行よりもよいとされた〔張 1990, 746〕。ただし同じ銀行員でも,一部の上級職員をのぞく大多数の中・下級職員は,工場の職員よりも少し待遇がよい程度であつたともいわれていた〔顧 1939, 633〕。

本稿では,第1に上海銀行の行員について,学歴・職歴および行内での役職を集計し,それらと給与所得との関係を見る。上海銀行の行員は,民国期における新しいタイプのビジネスエリートの典型例であつたといえるので,かれらが旧来の商工業従事者とどのように異なる出世の経路をたどつたのか明らかにしたい。また第2に,新中間層の出現が都市社会をどのように変貌させたのか考察するために,銀行員の家族ならびに女性行員に着眼したい。両大戦間期には,俸給生活者・専業主婦とその子女からなる小家族や,教育を受けた後に企業・機関に雇われて働く職業婦人が新たに登場した。本稿は,上海銀行行員の家族の他に,上海銀行行員などが開設し多くの女性が勤務した上海女子商業儲蓄銀行(以下,上海女子銀行)の女性行員とその家族を分析したい。

銀行員の経歴

1. 給与と年齢

上海銀行は,1915年,庄籙・孔祥熙・張謇らが出資し,陳光甫が総経理(総支配人)となつて創設した民間資本の商業銀行である。上海銀行は堅実な経営を展開し,国債や有価証券の購入には慎重で,不動産売買などの投機性の強い業務は行わず,企業・商工業者以外にも広範な都市民衆から預金を募り,短期的利益の最大化よりも最良のサービスを社会に提供することを目指した〔曾 2002〕。陳光甫は,民間の銀行業を「公益」事業と位置づけ〔上海市档案馆 2002, 51〕,「社会に服務」,「銀行が私,私が銀行」といった行訓を行員に示しながら厳格な人事管理を適用し〔鮑 1933, 17〕,1930年代までに上海銀行を従業員数や支店数において中国最大の民間銀行に成長させた(注4)。

上海銀行の資料はすでに一部公刊されたが〔中国人民銀行 1990;上海市档案馆 2002〕,他にも多くの未公刊文書が上海市档案馆に所蔵されており,本稿が分析する上海銀行人事処の人事記録もその一部である〔上海銀行 1937〕。当該文書は,上海銀行が所定の用紙を行員に配布し,行員各人が各項目について記載して人事部に提出したものであり,1937年の1年間に登録された合計1456人分の文書が残っているが,ここでは次節で分析する女性行員37人と性別不明の行員3人を除く1416人分の男性行員のデータを分析する。なお,分析対象にした行員の勤務地をみると,1416人の約3分の1近くにあたる448人が上海の本店(総行)に勤務し,残りは漢口に166人(11.7パーセント),南京に81人(5.7パーセ

表1 上海銀行行員の月給（1937年）

[単位：元，人，(%)]

月給	～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79
人数	12	87	147	193	244	213	124
(比率)	(0.8)	(6.1)	(10.4)	(13.6)	(17.2)	(15.1)	(8.8)

80～89	90～99	100～149	150～199	200～299	300～499	500～	77.3*
90	66	127	38	35	29	10	1415
(6.4)	(4.7)	(9.0)	(2.7)	(2.5)	(2.0)	(0.7)	(100)

(出所) 上海商業儲蓄銀行人事処(1937)より筆者集計。
 (注) *は平均の月給額。

ント),天津に48人(3.4パーセント),広州に45人(3.2パーセント)など,中国各地の分店(分行)・支店(支行)・営業所(分理処,辦事処)に勤務していた。

さて,1416人のうち1415人の行員が月給額を記載している。1415人の平均月給は77.3元であるが,表1からわかるように,40元以上70元未満の月給を得る行員が総数の3分の1以上を占めた。そして当時,アメリカの社会学者O・ラングは「30～40元から100～120元程度の月収」のある人々のつくる階級を「中産階級」と見なしており[Lang 1946, 92],その基準に従うと,上海銀行行員の8割以上(1159人)が「中産階級」に属していたといえる。また,1937年末から1939年にかけて中国共産党の職員運動委員会の責任者として上海の企業職員層を組織化する運動に従事した顧准は,当時の職員の月給を以下のように推計していた。すなわち,旧来の小規模商店では,中級店員が30元程度,下級店員が10～20元程度,大商店の大多数の職員が12～20元程度(商店の提供する食住を含む),大工場の中級職員が約30元,下級職員が約20元,練習生は10元以下であるのに対し,銀行の中級職員は50

～60元程度,大手銀行であると練習生でも30～40元程度の月給を得たという[顧 1939, 632-633] (注5)。これをふまえると,上海銀行行員の平均月給が,商店店員や工場職員はもちろん銀行員のなかでも,比較的高い水準にあったことを確認できる。

また,1937年において上海銀行の人事処に登録を行った男性行員は1416人,そのうち年齢を申告した者は1405人,平均年齢は30.7歳(数え年)である。1405人は15歳から62歳の間を表2

表2 上海銀行行員の年齢と月給(1937年)

[単位：歳，人，(%),元]

年齢	人数(比率)	平均月給	
		平均	最高
60～	7 (0.5)	77.1	
55～59	15 (1.1)	162.3	170.7
50～54	25 (1.8)	127.9	157.2
45～49	79 (5.6)	127.9	121.5
40～44	100 (7.1)		133.0
35～39	150 (10.7)	92.6	108.3
30～34	243 (17.3)	82.9	
25～29	414 (29.5)	53.4	62.4
20～25	348 (24.8)		42.6
～19	24 (1.7)	22.0	
計	1405 (100.0)	76.5	

(出所)表1に同じ。

研究ノート

のように分布しており、上海銀行は創設から22年経過した1937年の時点でも、従業員の半数以上が30歳未満、8割以上が20歳台と30歳台の若手行員で構成されていた。年齢と月給との関係を見ると、年齢に正比例して給与が上昇する傾向を確認でき、平均すると20歳台から「中産階級(middle class)」に属す水準の給与を得ることができたといえる。ただし、年功序列の給与制度が導入されていたわけではない。すなわち、40歳台後半の行員の平均月給(121.5元)は、40歳台前半の行員の平均月給(133.0元)よりも少し低く、また、60歳台の行員は全行員の平均程度の月給しか受け取らず、臨時の顧問・相談役等の職務を担っていたと考えられる。

2. 学歴

1416人のうち1291人が学歴を記載した。詳細は表3に示したが、約8割近く(78.5パーセント)の行員が中等水準以上の学校教育を受けていた。

上海銀行行員が学んだおもな学校を列挙しておきたい。海外で学んだ者は、アメリカのコロンビア大学7人、ニューヨーク大学3人、オハイオ大学・ミシガン大学・イェール大学・コーネル大学・ノースウエスタン大学各1人、その他1人、日本の東京帝国大学2人、東京工業大学・明治大学・長崎高等商業専門学校各1人、フランスのナンシー大学・リヨン高等商業専門学校各1人である。中国国内の大学では、復旦大学(上海)27人、聖約翰(セントジョン)大学(上海)22人、東呉大学(蘇州)18人、滬江大学(上海)15人、光華大学(上海)12人、金陵大学(南京)11人、東南大学(南京)・中央大学(南京)・国立上海商学院(上海)11人、南開大学(天津)8人、中華大学(武昌)8人、大同大学(上海)6人、暨南大学(商科は上海)4人、燕京大学(北平)3人などである。専科・職業・補習学校では、南通商業中学校15人、中華職業

表3 男性・女性行員と行員の妻(専業主婦)の学歴の比較(1935~52年)

[単位:人,(%),元]

学歴	男性行員 ⁽¹⁾		女性行員	行員の妻(専業主婦)
	人数(比率)	平均月給	人数(比率)	人数(比率)
海外留学	23 (1.8)	260.0	-	-
大学修業 ⁽²⁾	173 (13.4)	96.4	3 (5.9)	28 (4.3)
専科等 ⁽³⁾	200 (15.5)	81.1	12 (23.5)	20 (3.0)
中学修業	617 (47.8)	64.8	36 (70.6)	326 (49.7)
小学修業	88 (6.8)	54.1	-	171 (26.0)
私塾修業	190 (14.7)	58.8	-	43 (6.5)
無学歴	-	-	-	44 (6.7) ⁽⁴⁾
非識字	-	-	-	25 (3.8) ⁽⁴⁾
計	1291 (100)	73.4	51 (100)	657 (100) ⁽⁴⁾

(出所) 上海商業儲蓄銀行人事処(1937; 1945 - 1952), 上海女子商業儲蓄銀行(1935 - 1936)より筆者集計。

(注) (1) 男性行員は上海銀行, 女性行員は上海銀行と上海女子銀行, 行員の妻(専業主婦)は上海銀行のデータである。

(2) 大学院修業者を含む。

(3) 大学・中学水準の商科・師範等の専科・職業・補習学校の修業者を含む。

(4) 妻の「教育程度」の欄に何も記載しなかった322人を除いた人数。

教育社（上海）14人，南洋高級商業学校（上海）8人，（私立）金業商業学校（上海）6人，江蘇省立第一商業学校（上海）5人，立信會計学校（上海）4人，天津（私立）商業学校4人などが挙げられる。普通課程の中学校では，私立中学（上海）39人，南洋中学（上海）19人，（省立）上海中学16人，東呉大学附属中学（蘇州）13人，清心中学（上海）12人，青年会中学（上海）12人，晏成中学（蘇州）11人，中華大学附属中学（武昌）10人などの修業者が多い。

ところで表3をみると，海外留学者と大学修業者の平均月給が行員全体の平均月給よりもかなり高い水準にあり，学歴と給与の相関関係を確認できる。また，専科・職業・補習学校の専門課程に学んだ200人のうち92人（46.0パーセント）が商業科で学んだことを確認できる。そして，中等水準の専門課程で学んだ行員200人の平均月給は81.1元，そのうち商科で学んだ行員92人の平均月給は85.3元であり，普通課程の中等教育を受けた行員617人の平均月給64.8元よりも高い水準にある。したがって，専門課程や商科で習得した知識・技能が行内で高く評価されたといえる。他方，高級中学（＝後期中等教育機関）で学んだことを明記した行員100人の平均月収は72.4元であり，中等水準の教育を受けた行員全体（814人）の平均月収（68.8元）と大差はない。それゆえ，給与面を考慮すると，当時は初級中学（＝前期中等教育機関），あるいは専科・職業・補習学校で学んだ後に就職するのが，最も合理的な経歴になっていた。

さらに，上海銀行行員の学歴と給与を分析して興味深いのは，私塾（非正規の民間教育機関）でしか教育を受けていない行員が190人（14.7パーセント）もあり，しかも彼らの平均月給が正規の

初等教育を受けた行員よりも高い点である。私塾出身者の月給が高かった理由は，第1に，彼らの年齢が高かったためである。年齢のわかる1405人の平均年齢は30.7歳，50歳以上の者の比率は3.3パーセント（47人）であったのに対して，私塾出身者のうち年齢がわかる189人の平均年齢は37.1歳，50歳以上の者の比率は11.1パーセント（21人）であった。また第2に，私塾出身者は何らかの職歴を有する場合が多かった。表4からわかるように全行員のうち職歴を記載した者は56.7パーセントであったが，190人の私塾出身者のなかで職歴を記載した者は81.1パーセント（154人）に達した。そして第3に，私塾出身者は銭荘や銀号（旧来の小規模金融機関）で勤

表4 上海銀行行員の職歴と月給（1937年）

[単位：人，（％），元]

職歴	人数	（比率）	平均月給
金融	391	（48.7）	89.1
銀行	176	（21.9）	117.0
銭荘・銀号	205	（25.5）	65.8
その他	29	（3.6）	97.3
商業	262	（32.6）	72.4
外国資本	38	（4.7）	91.4
中国資本	68	（8.5）	75.3
旧商店	143	（17.8）	64.4
その他	17	（2.1）	67.2
工・鉱業	46	（5.7）	78.4
公務	84	（10.5）	83.1
教育	39	（4.9）	99.8
大学	11	（1.4）	176.0
その他	28	（3.5）	69.9
文化	17	（2.1）	83.0
その他	15	（1.9）	90.0
計	803	（100）	81.9

（出所）表1に同じ。

（注）複数の職場を挙げた者は複数回集計したが，同業種の組織を複数回挙げた者は1回だけ集計した。

務した職歴を有する者が多かった。職歴を記載した803人のうち銭荘・銀号で働いたことのある者は25.5パーセント(205人)であったが、私塾出身者で職歴を記載した154人のうち銭荘・銀号で働いた経験のある者は41.6パーセント(64人)に達した。したがって、上海銀行行員は「銭荘・銀号出身者以外はほとんどが下級中学が高級中学を卒業している」[伍 1932, 803]という状況に近かったといえる。すなわち、中国では旧来からの地場金融機関である銭荘・銀号から新式の銀行への転職が比較的容易であり、新・旧金融機関の従業員の間に明確な境界はなかった。1920～30年代には中国資本の新式銀行の勃興に伴って、銭荘は活動範囲を狭めたが^(注6)、中小商工業者の日常取引に便宜を供与して生き残った。また1930年代末の戦時期からはインフレが昂進して小規模な商店・工場が高利潤をあげたので、銭荘も投資・投機の機会に恵まれて繁盛し続けた。とくに多額の遊資が流入したが工業生産が麻痺していた1942年6月から43年6月にかけての上海では、英米系銀行の営業が停止したこともあって、上海では40～50軒程度しかなかった銭荘が一挙に193軒にまで激増した[久保 2005, 175]。こうした過渡期の金融業界の特異な活況を反映して、1930～40年代の銀行員のなかには、中・高等教育機関で普通・商業教育を受け行内での訓練を経て働き出す者が増えたが、私塾で学んだ後に銭荘・銀号で働きその経験を生かして働く者も絶えなかった。

3. 職歴・職務

1416人のなかで803人(56.7パーセント)が、以前に勤務した928機関を挙げた。表4で示したように、上海銀行行員のなかで当行以外の職歴を有する者のうち約半数近くが金融機関、約

3分の1近くが商業機関で働いた経験を有し、他にも公務(官庁・政府・党など)、工・鉱業(工場、石炭・鉄鉱関連など)、教育、文化(新聞・出版社など)の職歴をもつ者がいた。上海銀行の多くの行員が働いた経歴をもつ企業・機関を列举すると、16人が江蘇銀行、11人が中央銀行、7人が浙江興業銀行、6人が商務印書館、5人が交通銀行、花旗銀行(The International Banking Co.)、財政部、鉄路管理局(京滬・津浦)、通易信託公司、4人が美豊銀行(American Oriental Banking Co.)、聚興誠銀行、華俄道勝銀行(Banque Russo-Asiatique)、英美煙公司(British American Tobacco Co.)、中国旅行社、(蕪湖)同樂碾米公司(精米会社)、(蕪湖)商記碾米公司、公興存、3人が中国実業銀行、通和銀行、百匯銀行、潤康銭荘、信通銭荘、(蘇州)協來銭荘、(鎮江)長康銭荘、亜細亜火油公司、郵政儲金匯業局、棉業統制会、公和典に勤務していた。ここで注目し値するのは、1920年代以降には中国での業務を拡大しなかった外資系銀行から、同時期に急成長した中国資本系民間銀行に移動した人員が存在した点である。

また、職歴と月給との関係を表4からみると、以前に大学教員や銀行員であった者の平均月給が高いことがわかる。商業界では、外資系企業で働いていた者の平均月給が中国資本系企業の勤務経験者の平均月給よりも高く、さらに旧式の小規模商店(行・號・記・庄・棧など)で働いていた者の平均月給が最低になっている。この給与格差は、当時の外資系企業・中国資本系企業・小規模商店の給与水準を反映していたと考えられよう。そして金融業界では、銀行の勤務経験者の平均月給が、銭荘・銀号の勤務経験者の平均月給よりも格段に高く、新・旧金融機関

表5 上海銀行行員の配属部署と月給（1937年）

		[単位：人,(%), 元]		
部 署	人数	(比率)	平均月給	
管理	87	(17.8)	86.8	
業務	40	(8.2)	100.5	
人事	13	(2.7)	73.1	
調査	17	(3.5)	76.5	
総務	17	(3.5)	75.2	
営業	401	(82.2)	75.3	
営業	11	(2.3)	175.1	
会計	30	(6.1)	92.8	
預金	30	(6.1)	90.6	
貸付・「往来」 ⁽¹⁾	31	(6.4)	74.0	
内国為替 ⁽²⁾	46	(9.4)	75.8	
外国為替	27	(5.5)	89.4	
信託	33	(6.8)	68.5	
貯蓄	19	(3.8)	56.6	
出納	36	(7.4)	84.3	
保管庫	97	(19.9)	45.0	
特定取引先 ⁽³⁾	35	(7.2)	92.4	
その他	6	(1.2)	100.0	
計	488	(100)	77.3	

(出所) 表1に同じ。

(注) (1) 「往来」は銭荘業務のひとつで、当座勘定取引や無担保の信用貸付のこと。

(2) 「匯画」(取引者の帳簿を調査し為替の出入を記録する業務) を含む。

(3) 工業・農業・塩業等と関連する特定の企業との取引を担当した者。

の従業員の間にも給与面での格差が存在したと考えられる。給与・福利厚生・労働条件などに恵まれた銀行員は、銭荘・銀号従業員などからの転職希望者が後を絶たず、新興のビジネスエリートとなった。

ところで1934年、上海銀行は新たな「組織大綱」を公布し、本店と各分店・支店の組織をそれぞれ管理と営業の2部門に分け、管理部門に業務・人事・検査・調査・総務の5処、営業部門に営業・会計・預金(「在款」)・貸付(「放款」)・内国為替(「内匯」)・外国為替(「外匯」)・貯蓄(「儲蓄」)・信託・出納・保管庫(「倉庫」)等の16

部を設置した[何 1950, 58]。1937年に人事処に登録した全行員のなかで配属部門・部署を記載した者は488人(34.5パーセント)で、その内訳は表5のようになった。配属部署と給与との関連をみると、管理部門の平均月給は営業部門よりも若干高くなっている。また部署ごとにみると、営業部・業務処・会計部などの配属者や特定企業との取引担当者の平均月給が高く、逆に保管庫に配属された従業員の平均月給がきわめて低くなっており、金融の専門知識が必要な業務が高く評価された。

次に行員の役職についてみると、1416人のう

研究ノート

ち役職を記載した者は657人である。上海銀行の人事処が作成した職員の昇進序列の図によると、序列の最上位にあるのが秘書・専員・執行員、その下に執行助員・(会計)検査員、その下に編集員・設計員・主管員・会計員・営業員・出納員、その下に庶務員・文書員・照合員・調査員、その下に収支員・為替貸付員、その下に保存員・統計員・簿記員・技術員・保管庫員・保険員、最下位に書写員が配置された[上海銀行 n.d.] これを参考にして657人の役職を整理すると、表6で示したように、上級職員(総経理・経理・副経理・襄理・主任・副主任・代理主任・顧問・秘書・会計検査員といった経営・管理に携わる職員)に属する者が140人、一般の中級職

員が124人、下級職員と研修生が393人いた。そして役職と月給の関係をみると、1931年4月に総経理が通告した規定によれば、上級職員(「職員」)が190~380元、中級職員(「辦事員」)が100~190元、下級職員(「助員」・「試用助員」・「下級試用助員」)が30~95元の範囲内で、数等級に分かれた給与額が設定されていた[中国人民銀行1990, 818-819]。1937年の人事記録に記載された実際の月給額をみると、表6にまとめたように、経営・管理を行う上級職員の平均月給が204.4元、事務員(「辦事員」)の平均月給が125.5元、営業員・会計員・出納員などを含んだ中級職員全体の平均月給が82.5元、補助業務を行う下級職員の平均月給が49.6元であった。

表6 上海銀行行員の役職と月給(1937年)

[単位:人,(%),元]

役職	人数	(比率)	平均月給	
上級職員	経営・管理		140 (21.3)	204.4
	(会計)検査員		12 (1.8)	189.2
	その他		128 (19.5)	205.8
中級職員	一般業務		124 (18.9)	82.5
	事務員(「辦事員」)		20 (3.0)	125.5
	営業員*		28 (4.3)	74.4
	会計員*		25 (3.8)	71.5
	出納員*		17 (2.6)	74.7
	その他*		34 (5.2)	76.1
下級職員	補助業務		393 (59.8)	49.6
	保管庫員		90 (13.7)	39.9
	助員		180 (27.4)	65.4
	試用助員		46 (7.0)	40.9
	初級試用助員		24 (3.7)	31.4
	訓練・練習生		53 (8.1)	28.4
研修生			53 (8.1)	28.4
計			657 (100)	88.2

(出所)表1に同じ。

(注)*営業員・会計員・出納員などと申請した職員の中には、助員として待遇された者や試用期間中の者が含まれた。また、上級職員の方が中級職員よりも役職を人事記録に明記して申請する場合が多かったので、本表において上級職員数が中級職員数を上回ったと考えられる。

こうした給与水準の上海銀行行員は、生活にどの程度のゆとりがあったのだろうか。それを考える上では、上海市政府社会局が労資紛争を調停する際に基準とするために公表していた生活費指数を参考にできる。1937年の指数を推算すると^(注7)、労働者世帯が1カ月の生活を維持するために必要最低限な生活費は約13.0元、望ましい生活費は約17.9元、そして職員世帯の1カ月の生活に必要な最低限な生活費は約57.9元、望ましい生活費は約72.9元とされた。したがって、上海銀行の上級・中級職員は、俸給だけで余裕をもって職員世帯の消費水準を維持できたし、下級職員でも、俸給とその他の家族の収入を合わせれば企業職員の消費水準を維持でき、さらに最も給与の低い初級試用助員や訓練生・練習生にしても、労働者世帯よりは一段上の「中産階級」の消費生活を享受できたと考えられる。なお岩間(2002, 133)で論及したように、その後の日中戦争期から国共内戦期を経て中華人民共和国成立当初までインフレが急激に昂進したが、物価上昇に伴う職員俸給の増加率は労働者賃金の増加率よりも低く、職員と労働者ならびに上・中級職員と下級職員間の実質的な所得・生活水準の格差は縮小していったと考えられる。

銀行員の家族と女性行員

1. 上海銀行行員の家族状況

上海銀行の人事処は各行員の個人情報にくわえて、家族状況に関する文書を提出させて保管した。現在は上海市档案馆に所蔵されている上海銀行行員の「家族概況表」からは、次項で検討する女性行員を除き、文書を複数年度にわた

って複数回提出した者は記載量が多い方を1枚だけ採用すると、男性行員1254人^(注8)、1254世帯の家族状況を見ることができる[上海銀行1945-1952]。文書の記載時期は、1945年に記載した者が4人、46年が194人、47年が42人、48年が44人、49年が最多の763人(60.8パーセント)、50年が51人、51年が11人、52年が14人、記載した年次が不明な者(ただし1945~1952年の間とほぼ特定できる)が131人である。また、「家族概況表」を記載した行員1254人の勤務地は上海が686人(54.7パーセント)で、あとは南京104人、天津85人、漢口66人、広州41人、青島32人、北京29人などで勤務し、勤務地の無記載者が13人いた。

「家族概況表」を記載した男性行員1254人の年齢(数え年)は、16歳から66歳までで、平均年齢は37.1歳であった。1937年に人事処に登録された男性行員1405人の平均年齢は30.7歳であり(前節参照)、それから8~15年経過して年齢層が上昇したことがわかる。そして、上海銀行の男性行員1254人のうち、5人が各1人ずつ第2夫人(妾)をもち、未婚者・離婚者・寡夫および妻に関して何も記載しなかった者が249名いたために、銀行員の妻1010人について分析できる。そのうち年齢の判明した行員の妻は1008人、18歳から63歳までで、平均年齢は35.5歳であった。夫婦間の年齢差がわかるのは計1007組で、そのうち最大の年齢差は29歳、夫が妻よりも6歳以上年上の夫婦が205組、1歳~5歳年上の夫婦は551組、同年齢の夫婦が131組、妻が夫よりも年上(1歳~4歳)の夫婦が120組いた。夫が妻よりも1~5歳年長の夫婦が過半数を占めた。

行員の妻1010人のうち家庭外で職をもつ者はわずかに31人(3.1パーセント)で、内訳は教育

表7 上海銀行行員の男性行員世帯の子女数（1945～52年）

[単位：人，世帯，(％)]

子女	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	3.02*
世帯	2	10	25	70	112	168	246	177	169	81	1060
比率	(0.2)	(0.9)	(2.4)	(6.6)	(10.6)	(15.8)	(23.2)	(16.7)	(15.9)	(7.6)	(100)

(出所) 上海商業儲蓄銀行人事処(1945～52)より筆者集計。

(注) *は、男性行員1060世帯の平均子女数。

(小学校・託児所など)が8人、金融・商業(上海銀行・人民銀行など)が8人、工場労働(中紡廠・三北機器廠など)が5人、医療(助産士など)が4人、公務(軍・郵政儲金匯業局など)が4人、農業が1人、雑務(洗濯)が1人となっている。他方、配偶者の職業を記載する欄に家事と関連する事項(「家務」、「家居」など)を記載した者が計362人(35.8パーセント)もいた。くわえて、配偶者の職業を「無」と記載した者が335人、「暫無」・「失業」・「尚未決定」・「染病閑居」・「無職業」が各1人あり、それらの合計は340人(33.7パーセント)となり、さらに職業欄に記載のない者277人(27.4パーセント)のほとんども無職と推察できる。したがって、中華人民共和国成立前後の時期には大多数の銀行員の妻が専業主婦であったと考えられる。

それでは、家庭外就業を確認できる31人を除いた専業主婦と考えられる979人のうち、「教育程度」の記載があった657人の学歴を分析すると、表3のようになる。銀行員の妻の学歴は、大学卒業者から非識字者まできわめて多様であった。しかし、「教育程度」を記載しなかった者を除けば、銀行員世帯の主婦の半数以上が高等・中等教育水準の学歴を有し、8割以上が初等教育以上の学校で学んだ経歴をもっていた^(注9)。民国期の都市では家事の合理化・科学化が進展し[游2005]、専業主婦であっても学校で学んだ知

識を必要とするようになっていたので、多くの銀行員が学校教育を受けた女性を妻とし、近代的な家政知識にもとづいて家庭生活が処理されるのを望んだと考えられる。ただし、上海銀行の男性行員は8割近くが中等教育水準以上の学歴を有したので、男性行員本人より低学歴の主婦が3割以上を占めたことになる。したがって銀行員たちは、自分と比べてほぼ同学歴ないしは低学歴の女性と結婚し、専業主婦とする場合が多かったといえる。

続いて子女数についてみると、結婚を確認できた男性行員1060人(妻と離別・死別した者を含む)の子女数は表7に示した通りで、上海銀行の既婚男性行員の世帯の平均子女数は3.02人であった。1941年末に共同租界工部局工業社会処が実施した職員の家計調査によると、上海の企業職員100世帯の平均子女数は3.45人であり[The Industrial and Social Division 1942, 15]、本稿の分析結果と考え合わせると、1940年代上海の企業職員世帯には平均約3人強の子女がいたといえる。ただし、妻の家庭外就業を確認できる行員31世帯の平均子女数は2.13人であった。この結果を、労働者の場合と簡単に比較したい。1941年の工部局工業社会処の調査によると、上海の労働者世帯の子女数は平均で2.14人であり[The Industrial and Social Division 1942, 15]、また1929～30年に市政府社会局が実施した詳細な生

表8 家族の大きさと型(1936~37年)

[単位: 家族, 人, %]

		賃金生活者	下層中産階級	中産階級	上流階級
上海	対象家族数	143	42	15	8
	家族の人数	5.2	3.3	4.4	6.7
	小家族の比率	71	62	73	50
北京等	対象家族数	426	251	496	192
	家族の人数	3.7	4.6	6.1	6.4
	小家族の比率	58	51	50	52

(出所) Lang (1946, 136-137, 148) より作成。

(注) 表中の「北京等」とは「北京を主とする華北の工業都市」。「小家族」とは、夫婦家族・核家族のこと。上海の「賃金生活者」はすべて工場労働者。「中産階級」とは、「俸給生活者・教師・事務員・小役人などで、30~40元から100~120元見当の月収のある者」。「下層中産階級」は、月収が「中産階級」以下の小商人・店員、小さな仕事場の親方や職人など。「上流階級」は、月収が「中産階級」以上の技師など。

活調査によると、労働者世帯の妻の46.8パーセントは家庭外で就業していた[上海市政府社会局 1934, 14]。したがって、銀行員をはじめとする高学歴・高所得の職員は、低学歴・低所得の労働者よりも子女数が平均約1人程度多かったといえるが、妻が家庭外で働いている職員世帯の子女数は労働者世帯とほぼ同数であったことから、大多数の職員の妻が専業主婦として家庭内で家事・育児に専念できたことが子女数の増加につながったといえる。

最後に家族の大きさと型をみると、同居者数を記載した行員は846人であった。本稿では可能な限り、本人を含み使用人を含まない人数に統一して集計した。1世帯の最大人数は30人で、構成員が10人より多い世帯が50世帯(5.9パーセント)、6~10人が387世帯(45.7パーセント)、5人以下が409世帯(48.3パーセント)であり、1世帯の平均構成員数は6.2人であった。1941年末の工部局工業社会処の調査によると、職員世帯の構成員数は使用人を除くと平均5.17~5.66人、労働者世帯の構成員数は平均5.02人であり[岩

間 2002, 133], 上海銀行男性行員の世帯は、平均的な職員世帯よりもさらに少し大所帯の傾向があったといえる。ただし、夫婦家族(夫妻の2人家族、妾のいる場合も除く)ないしは核家族(夫妻とその子女の家族)は、「家族概況表」から確認できただけで、846世帯(1人暮らしの2世帯を含む)のうちの346世帯(40.9パーセント)を占めた。この結果を、O・ラングの1936~37年の調査結果をまとめた表8と比較すると、ラングの上海調査は、対象とした「中産階級」の家族数が少なすぎて信頼しがたい。逆に、調査対象の家族数が十分にある北京など華北工業都市の「中産階級」、「上流階級」のデータが、本稿でえられた上海銀行男性行員の家族の大きさや型とほぼ一致した。したがって、民国後期の都市社会では、夫婦家族と核家族が約半数程度を占めるまでひろく普及した一方で、経済力や社会的地位が上昇するほど子女や家族の人数が増加する傾向が依然としてあった。

くわえて、以上で分析した上海銀行行員世帯の居住環境について推察しておきたい。上海で

は給与が高く就職機会も多いので、北京などに比べて賃金・俸給生活者の生活水準は高かったが、住宅状況は悪かったといわれる〔Lang 1946, 89〕。上海の一般的な集合住宅である2階建ての里弄は、19世紀後半には2つの母屋の両側に3部屋以上ずつ2列あるU字形の間取りが一般的であったが、しだいに1つの母屋の片側に1列3部屋があるだけの間取りが増え、そして1920年代からは1列に母屋・中部屋・小部屋しかない「単開間」という間取りが普及した。狭くて部屋数の少ない家屋が増加した背景には、里弄式住宅の住人が商人や官僚などの富裕層から都市中間層や労働者階級上層に変わったことがあった〔Lu 1999, 146-156〕。さらに、日本軍が華界を占領した「孤島」時期の上海租界地区には多くの難民が流入したので、居住環境はいつそう悪化した。例えば、1941年末の工部局工業社会処の調査によると、職員1世帯(使用人を入れて平均7.06人)は150平方フィート(約13.94平方メートル)の標準部屋を平均2.50部屋、計34.85平方メートル占有したのみだという〔The Industrial and Social Division 1942, 17-18〕。1920年代以降に普及した「単開間」の里弄は、専有面積を22.75平方メートル(=3.5メートル×6.5メートル)まで縮減することがあったが〔Lu 1999, 150〕、その最も狭い型の里弄式住宅でも、平均的な職員1世帯は1・2階の全空間を占有せず、下宿人に間貸しをするなどしていたことになる(注10)。

2. 上海銀行・上海女子銀行の女性行員の経歴と家族

さて次に、上海銀行と上海女子銀行に勤務した女性行員について検証したい。上海銀行は1915年に開業してまもなく婦女部を設立した。

1924年、その主任を務めた嚴叔和が総経理となって、上海女子銀行を開業した。女子銀行とは、女性に貯蓄を提唱し、その資金を使って国家や実業を発展させると同時に、女性の経済的独立や社会的解放を達成することを目指した銀行である。北京の中国女子商業儲蓄銀行(1921~25年)に続いて、上海女子銀行は中国で2番目に早く開設され、職業婦人や主婦の花嫁資金・教育費・養老費などの貯蓄、女学校の学費受領の代行、女性の開業者への投資などを主要業務とし、1955年に公私合営銀行に接收されるまで営業を続けた(注11)。また、当時の実業界で働く職業婦人のなかで女性行員は「もっとも先進的で、もっとも数多く、もっとも適当」な職業であるとされた〔陳 1924, 905〕。とくに上海女子銀行は、女性が職業をもって経済的地位を向上させることを提唱していたので、多くの女性行員が勤務し、50~80人程度の従業員のうち、開業時には約4分の3、廃業間近の1950年でも約4割を女性行員が占めた〔史 2004, 21〕。ちなみに、上海女子銀行は開業当初に女性の練習生を10名ほど採用したが、採用条件は「18歳以上32歳以下、初級中学校程度(の学歴)と保証(人)があり、銀行内の宿舎に住める」ことになっていた〔陳 1924, 903〕。

ここでは、上海銀行にくわえて、女性行員の多い上海女子銀行のデータを補充して、職業婦人の経歴と家族の実態を明らかにしたい。上海銀行の女性行員の個人情報(1)人事記録〔上海銀行 1937〕から37人分、(2)家族調査〔上海銀行 1945-1952〕において上海銀行に夫婦共働きする男性行員が記載した文書から8人分をみられるが、(1)と(2)のなかで2人が重複しているので、計43人分のデータを集計できる。また、上海女

子銀行の女性行員についても、人事記録の一部が上海市档案馆に保存されており、(3)履歴書 [上海女子銀行 1935-1936] から19人分、(4)従業員調査書 [上海女子銀行 1951] から28人分、計47人分のデータを集計できた。以下では、上海銀行と上海女子銀行の女性行員に関する4種類のデータを分析していく。

女性行員の平均年齢は、上海銀行では(1)29.8歳 [上海銀行 1937]、(2)31.8歳 [上海銀行 1945-1952]、全体で30.1歳、上海女子銀行では(3)26.5歳 [上海女子銀行 1935-1936]、(4)36.0歳 [上海女子銀行 1951]、全体で32.1歳であり、概して30歳前後であったといえる。また月給は、1937年の時点における上海銀行の女性行員37人に関してだけわかるが、最高額が110元、最低額が35元、45～70元の範囲内に27人(73.0パーセント)があり、平均は59.5元であり [上海銀行 1937]、前節でみた同時期・同行の男性行員の平均月給76.5元よりは低いものの、その月給だけで家族が「中産階級」さらには企業職員にふさわしい消費生活を維持できる水準にあった。

学歴については、1935～37年の両行女性行員の56人のうち、無記載者の5人を除く51人に関して分析できる [上海銀行 1937; 上海女子銀行 1935-1936]。表3で示したように、学歴を記載したすべての女性行員が中等水準以上の教育を受けていたことを確認できる。ちなみに、1935～36年に上海女子銀行に勤務していた11人の女性行員は、上海女子銀行が1930年に開設した允中女子中学校銀行科で学んだ者であった [上海女子銀行 1935-1936]。さらに注目すべきことに、上海銀行の男性行員の2割以上を占めた私塾や小学校の出身者は、女性行員には1人も見られなかった。この結果は、実業界で働く女性職員

の「大多数が普通中学校程度」の教育水準であるという当時の分析と一致する [陳 1924, 905]。そして表3および注9のデータを参照すると、職業婦人の学歴は専業主婦に比べて均質的で、相対的に高水準であったといえる。また、職業婦人の7割以上、専業主婦の半数近くが中学校で学んだ後に就職ないしは結婚をしており、民国後期の都市中間層の女性たちは、しばしば中学校を出た時点で人生の岐路に立っていたことがわかる。

職歴について、上海銀行・上海女子銀行の女性行員90人のうち、学校教員・家庭教師の経験者が14人、会計員は4人、電話交換手は2人、看護師は2人、その他の職員・事務員・練習生の経験者は5人であった [上海銀行 1937; 1945-1952; 上海女子銀行 1935-1936; 1951]。ちなみに、もっとも数多くの転職を経験した顧某(47歳)は、1930年から1951年の21年間で、浙江省の県立女校・中山公学、および杭州の蚕桑講習所で教員、杭州の改良蚕種製造場で総務担当、南京の交通部供應委員会で事務員、武昌・長沙・常德などの戦時工作幹部訓練団の補助教員、重慶の交通部材料廠で事務員、重慶の農民銀行総管理处印刷所で事務員を経た後、上海女子銀行で文書処理に従事した [上海女子銀行 1951, Q271-1-54-51]。そして注目すべきことに、男性行員に最多であった銭荘・銀号で働いた職歴を有する者が、女性行員には1人もおらず、男・女行員の経歴の差異が明白になる。すなわち、同じ銀行員でも男性行員の経歴は旧来の金融業者と同様の場合があったのに対して、伝統的地場金融機関の銭荘・銀号は女性を雇用しなかったため、そこで職歴を生かして新式銀行に転職するという経路が女性には存在せず、すべての女性行員は中

等・高等教育機関で学んで銀行に就職するという新しい経歴をたどった。また、それゆえ民国期における新・旧金融機関の顕著な相違点として、所有者が多数の株主か少数の個人か、経営者が雇用された専門職の者たちか個人所有者かといった点の他に [Cheng 2003, 221], 女性職員の有無を挙げられ、さらに上海の商店・企業にもかなりひろく同様のことが当てはまると考えられる。

行内での女性行員の配属について、1937年の上海銀行では、総務に5人、信託に5人、預金・貯蓄に4人、会計に2人、営業・外国為替・秘書・「往来」(当座勘定取引や無担保の信用貸付)に各1人ずつ配属され [上海銀行 1937], 1951年の上海女子銀行では、「往来」に7人、預金・貯蓄に4人、出納に2人、会計・保管庫・貸付・文書・秘書・その他に各1人ずつ配属されていた [上海女子銀行 1951]。女性行員は、偏りなく各部署に配属されていた。役職をみると、1937年の上海銀行では、役職を記載した16人のうち、主任・職員・事務員は1人もおらず、補佐員が7人、試用補佐員が6人、電話交換員が3人、その他の係員が2人であり、多くの女性が責任の軽い職務に任用されていた [上海銀行 1937]。それに対して、1951年の上海女子銀行をみると、役職を記載した27人のうち、主任が1人、職員が9人、事務員が14人、電話交換員が1人、雑務員が2人で、女性が重責を担っており [上海女子銀行 1951], 女子銀行の特徴が表れている。

女性行員の婚姻状況を見ると、1935～1936年の上海女子銀行では、婚姻状況を記載した14人全員が未婚であるのに対して [上海女子銀行 1935-1936], 1951年の上海女子銀行では婚姻状況記載者の4人全員が既婚であり [上海女子銀行

行 1951], 1949～1950年に上海銀行の男性行員が「家族概況表」に記載した妻の女性行員8人も当然ながら既婚であった [上海銀行 1945-1952]。1930～50年代にかけて、女性行員のなかに既婚者の占める割合が増加傾向にあったと考えられる。また、女性行員世帯の子女数をみると、1945～1952年の上海銀行・上海女子銀行の女性行員10人が子女数を記載したが、子女数は1世帯に1～4人、10世帯の子女数の合計は15人で、1世帯に平均1.50人の子女がいた [上海銀行 1945-1952 ; 上海女子銀行 1951]。子女数について行員の妻と女性行員を比較すると、上海銀行の行員世帯のうち、妻が専業主婦の1029世帯の子女数は平均3.04人、妻が家族外で仕事をもつ31世帯の子女数は平均2.13人、そして上海銀行・上海女子銀行の女性行員の10世帯の平均子女数は1.50人である。銀行員世帯の事例をみれば、1930～50年代中国の職業婦人が生育する子女数は、専業主婦の子女数のおよそ3分の1から2分の1程度であったと考えられる。

おわりに

本稿は、中国都市の新中間層に関するもっとも早い時期のデータを提供しながら、上海銀行・上海女子銀行の行員の給与・経歴・家族について、1937～52年の人事記録・履歴書・調査書を用いて明らかにした。

第1に給与をみると、上海銀行の男性行員の平均月給は、商店店員や工場職員はもちろん銀行員のなかでも、比較的高い水準にあった。1937年には経営・管理を行う上級・中級職員の平均月給が204.4元、一般業務を行う中級・下級職員の平均月給が82.5元、補助業務を行う下級

職員（助員・練習生等）の平均月給が49.6元であった。上海銀行の上級・中級職員は、上海市政府社会局が公表した職員世帯に望ましい消費水準を余裕をもって維持できたし、下級職員でも、俸給とその他の家族の収入を合わせれば職員世帯に必要な消費水準を十分に享受でき、さらに最も給与の低い初級試用助員や訓練生・練習生にしても、労働者世帯よりは一段上の、O・ランクが「中産階級」と定めた生活水準を何とか維持できた。

第2に経歴をみると、上海銀行の男性行員は、中等水準以上の教育を約8割近くが受けているが、小学校で学んだだけの者が約7パーセント、そして私塾でのみ教育を受けた者が約15パーセントもいた。また彼らのなかには、銀行、銭荘・銀号や小商店で働いたことのある者が数多くいた。それに対して、上海銀行・上海女子銀行の女性行員はすべて中等水準以上の教育を受け、さらに3割近くが学校や家族で教師をしていたが、銭荘・銀号で働いた職歴のある者は1人もいなかった。すなわち、男性行員では中学・大学で学んだ後に行内で訓練をうけて働きだす者が増えた一方で、私塾で学び銭荘・銀号で働いた経験を生かして新式銀行に転職する者も絶えなかったのに対して、伝統的な地場金融機関の銭荘・銀号は女性を雇用しなかったので、すべての女性行員は中等・高等教育機関で学んだ後で銀行に就職するという新しい経歴をたどった。男性行員の経歴からは、過渡期における新・旧金融機関の従業員の連続面を、女性行員の経歴からは断絶面を顕著に見てとれる。

第3に家族をみると、上海銀行の行員の妻のほとんどは専業主婦であった。銀行員世帯の主婦の教育程度は、大卒から非識字まで多様だっ

たが、中等教育水準以上の学歴のある者が学歴記載者の約6割近くに達した。科学的な家政知識が普及しつつあった当時、多くの行員が、ある程度の学校教育を受けた女性と結婚し専業主婦とすることを望んだと考えられる。また、行員世帯の平均構成員数は6.2人（使用人を除く）であり、約4割以上が夫婦家族・核家族であった。そして、妻が専業主婦の行員世帯は平均で約3人の子女を生育したのに対して、妻が家族外で働く行員世帯は平均でそのおよそ3分の2から半数の子女しか生育しなかった。女性行員の方が銀行員世帯の主婦よりも高学歴・少子の傾向があった。

概して、1937～52年の銀行員の間では、高学歴を高収入に結びつける意欲、専門知識を生かした就職・転職・昇進、学校教育を受けた女性との結婚、夫婦と子供だけの家族生活、妻の専業主婦化、共働き世帯の少子化など、欧米や日本の都市でも見られた新中間層の生活戦略が普及しつつあった。しかし同時に、私塾・銭荘等の出身者、無学歴や非識字者の妻、3世代以上の家族・親族が同居する大家族世帯、地位や経済力が上がるほど子女や家族の人数が増える傾向など、旧来の商人の性質を残した銀行員とその家族も健在であり、中国都市の新中間層が当時依然として形成過程にあったことを確認できる。

以上のように本稿は、現在の中国で公開や発掘が進んでいる民国期の各機関の人事記録を史料として本格的に分析した最初期の試みといえるが、今後の課題として、当時の上海および他の都市のできるだけ多くの企業・機関従業員のデータと比較・検討がなされるべきなのはいうまでもない。また共産党政権下において、企業

職員は「労働者の特殊な一部」とされたが、管理職員や技術人員のなかには「小資産階級」「資本家の代理人」などと称されて、「批判」「自己批判」「学習」「改造」などを迫られた者も少なくなかった。中華人民共和国成立後に発動された大衆運動が、上海の俸給生活者たちの境遇や家族生活にどのような影響を与えたのか、続稿で検討してみたい。

(注1) 本稿は、大組織に雇われて頭脳・精神労働に従事する俸給生活者とその家族を「新中間層」と定義する。近年の研究で、アジア諸地域における新中間層の勃興は民主的な市民社会の成熟に直結しないことが論証された[岩崎 1998; 服部・船津・鳥居 2002]。また中国都市の新中間層に関する歴史研究には、概説的な言及や資料集を除くと、労働運動に関して中共上海市委党史資料徴集委員会(1999)、銀行員の職場秩序に関してYeh(1995)、医師・弁護士・ジャーナリストについてXu(2001)、職業婦人に関してLien(2001)、商業教育との関連について岩間(2003)がある。

(注2) これまで、民国期の企業職員の経歴を集計したデータはほとんどなく、また当時の都市中間層の家族状況についても、S・ギャンブルが1926~27年に北平で実施した調査[Gamble 1933]、O・ラングが1936~37年に上海と北平で実施した調査[Lang 1946]、上海の共同租界工部局工業社会処が1941年末に実施した調査があるのみである。各調査の限界など詳しくは岩間(2002)を参照されたい。

(注3) 参考までに上海の工場労働者数は、1934年の市政府社会局の調査によると、約70万人であった[羅・宋 1999, 137]。また、1937年当時の上海の総人口は約385万人程度と推計されることから[鄒依仁 1980, 90]、企業職員層は上海地域において存在感のある社会集団に成長していたといえよう。

(注4) ただし、当時としては斬新な行訓や人事管理法にも関わらず、上海銀行が行員の不正・汚職行為に手を焼いていたことは、李(2004)に詳しい。

(注5) 顧准の示す給与額は、急激なインフレが始まる1937年よりも前の水準である。また、工場労働者

の賃金は旧来の小商店の店員とほぼ同水準にあった[岩間 2002, 143]

(注6) 1925年から1936年にかけて、銭荘が総資本額を微減させ、中国資本の銀行が総資本額を約4.8倍に増やしたので、中国の金融市場における、銭荘の資本力が22.5パーセントから8.9パーセントに低下したのに対して、中国資本の銀行の資本力は40.8パーセントから77.7パーセントに増加したとする試算がある[Cheng 2003, 241]

(注7) 1936年と1941年の職員・労働者の生活費指数については、岩間(2002, 132-135)を参照されたい。1937年には職員の生活費指数が公表されず、1937年には36年に比べて、卸売物価指数が18.6パーセント、労働者の生活費指数が19.08パーセント上昇したので[中国科学院上海経済研究所 1958, 84]、本稿では職員的生活費指数も約19パーセント上昇したと想定して試算した。

(注8) 1950年の時点における上海銀行行員の年齢・勤続年数・基本月給については、何(1950, 59-60)が簡単な分析を行っており、そのデータは本稿の分析結果とほぼ一致・整合した。

(注9) ちなみに、上海銀行行員の妻で有職者と確認できる31人の学歴をみると、大学・各種専科の修業者が各6人(19.4パーセント)、中学校修業以上が25人(80.6パーセント)、「無」「非識字」が各1人、無記載が4人であり、専業主婦の妻よりも高学歴を有したといえる。

(注10) なお、上海の職員世帯の支出に占める住居費の割合や、労働者世帯の居住環境との比較などは、岩間(2002, 134-135)を参照されたい。

(注11) 陳(1924, 902-903)および史(2004, 6-10, 26-27)を参照されたい。上海女子銀行については先行研究が欠落していたが、近年、上海市档案馆所蔵の内部文書を分析した研究成果が初めて発表された[史 2004]。それによると、女性の地位向上を主旨とした設立された上海女子銀行であったが、実際には女性行員の結婚・出産後の再雇用を拒むことがあり、また公言されていた女性の貯蓄を優待する業務も実行されなかった。

文献リスト

<日本語文献>

- 岩崎育夫編 1998. 『アジアと市民社会 国家と社会の政治力学』研究双書No.484アジア経済研究所.
- 岩間一弘 2002. 「1940年前後の上海における職員層の生活状況」『東洋学報』84(1)(6月)117-146.
2003. 「両大戦間期の上海における商業教育の展開と新中間層形成 国立上海商学院を中心に」『中国 社会と文化』(18)(6月)185-208.
- 久保亨 2005. 『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院.
- 曾憲明 2002. 「上海商業儲蓄銀行にみる中国銀行業の形成過程(1920~1931年) 上海における貸付業務の分析を中心に」『社会経済史学』6(5)(1月)71-88.
- 園田茂人 2001. 『現代中国の階層変動』中央大学出版部.
- 服部民夫・船津鶴代・鳥居高編 2002. 『アジア中間層の生成と特質』研究双書No.521日本貿易振興会アジア経済研究所.
- 游鑑明 2005. 「『婦女雜誌』から近代家政知識の構築を見る 食・衣・住を例として」(大澤筆訳)
- 村田雄二郎編『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』研文出版72-103.
- <中国語文献>
- 鮑咸鏞 1933. 「銀行是我我是銀行」『海光』5(11)(11月)17-19.
- 陳有琴 1924. 「中国商業女子の現状」『婦女雜誌』10(6)(6月)900-906.
- 顧准 1939. 「上海各業職員」朱邦興・胡林閣・徐声編『上海産業と上海職工』香港遠東出版社619-635.
- 顧准 1939. 「上海職員と職員運動(1)~(4)」『職業生活』1(1)(4)(4月15日~5月6日)は同文.
- 何陶如 1950. 「銀行人事管理」上海金融工会上海商業儲蓄銀行分会編『業務討論会的報告』対内参考文献57-64.
- 李培德 2004. 「論1920至1930年代上海商業儲蓄銀行行

員舞弊」国際学術研討会『近代中国的財政変遷と企業文化』中央研究院近代史研究所における報告原稿.

- 羅蘇文・宋鑽友 1999. 『上海通史第9巻 民国社会』上海人民出版社.
- 陸学芸 2002. 『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社.
- 上海市社会局編 1934. 『上海市工人生活程度』中華書局.
- 編 1936. 『上海市教育統計(民国二十三・二十四年度)』.
- 上海女子商業儲蓄銀行 1935-1936. 「員生履歴表」(上海市档案馆所蔵, Q271-1-54)
1951. 「金融業第二聯営総管理処 職工調査表」(上海市档案馆所蔵, Q271-1-54)
- 上海商業儲蓄銀行人事処 1937. 文書名なし(人事記録)(上海市档案馆所蔵, Q275-1-1273~6)
- 1945~1952. 「家庭概況表」(上海市档案馆所蔵, Q275-1-1191~5)
- n.d. 『職務解析』(上海図書館所蔵)
- 上海市档案馆 2002. 『陳光甫日記』上海書店出版社.
- 史麗立 2004. 「上海灘第一家女子銀行 上海女子商業儲蓄銀行」国際学術研討会『百年中国女権思潮研究』復旦大学における報告原稿.
- 天津総工会籌委会 1949. 「關於公營企業中加強職工團結及管理民主化討論提綱」『天津日報』6月27日.
- 伍克家 1932. 「人事科工作報告」『海光』4(12)(11月)中国人民銀行上海市分行金融研究所編(1990)『上海商業儲蓄銀行史料』上海人民出版社 802-804.
- 張仲礼主編 1990. 『近代上海城市研究』上海人民出版社.
- 職業と修養社 1939. 「銀行職員的生活」『職業と修養』1(5)(8月)158-159.
- 中共上海市委党史史料徵集委員会他編 1999. 『上海店員和職員運動史, 1919~1949年』上海社会科学院出版社.
- 中国科学院上海經濟研究所・上海社会科学院經濟研究所編 1958. 『上海解放前後物價資料匯編(1921-1957年)』上海人民出版社.
- 中国人民銀行上海市分行金融研究所編 1990. 『上海商

~~~~~ 研究ノート ~~~~~

- 業儲蓄銀行史料』上海人民出版社。  
鄒依仁 1980.『旧上海人口變遷的研究』上海人民出版社。
- < 英語文献 >
- Cheng, Linsun 2003. *Banking in Modern China: Entrepreneurs, Professional Managers, and the Development of Chinese Banks, 1897-1937*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- Gamble, Sidney J., 1933. *How Chinese Families Live in Peiping*. New York and London: Funk & Wagnalls Company ( 邦訳は福武直 1940. 『北京の支那家族生活』生活社 )
- Lang, Olga 1946. *Chinese Family and Society*. New Haven: Yale University Press( 邦訳は小川修1953. 『中国の家族と社会』 ・ 岩波書店 )
- Lien, Ling-ling 2001. " Searching for the ' New Womanhood ' : Career Women in Shanghai, 1912-1945." Ph.D. dissertation, Irvine: University of California.
- The Industrial and Social Division of the Shanghai Municipal Council 1942. " Provisional Index of

- Cost of Living of Chinese Salaried Employees in Shanghai." an unpublished document, in the Shanghai Municipal Archive ( U1-10-16 )
- Xu, Xiaoqun 2001. *Chinese Professionals and the Republican State: The Rise of Professional Associations in Shanghai, 1912-1937*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- Yeh, Wen-hsin 1995. " Corporate Space, Communal Time: Everyday Life in Shanghai's Bank of China." *The American Historical Review* 100( 1 ) ( February ) 97-122.

**【付記】** 本研究を進めるにあたっては、富士ゼロックス・小林フェロシップ(「20世紀上海の新中間層に関する歴史的研究 企業職員履歴書の分析」2003年度)の助成を受け、その報告書の一部に基づいて本稿を作成した。謹んで謝意を表したい。

( 千葉商科大学商経学部助教授, 2005年3月14日 受付, 2005年12月1日レフェリーの審査を経て掲載 決定 )